

# Jピアニスト

今飛び立つ！

新世紀の若手演奏家30人

本間ひろむ



## ワルシャワの衝撃から、 黄金時代へ

牛田智大



藤田真央



角野隼斗  
(かていん)



亀井聖矢



世界を熱狂させるピアニスター30人の「悪魔の血の一滴」の秘密に迫る

付録

サブスクで聴く！  
QRリンク付きアルバムガイド



星海社

377



SEIKAISHA  
SHINSHO

Jピアニスト

今飛び立つ！

新世紀の若手演奏家30人

本間ひろむ



## 1st stage

---

prologue 10

# Warsaw Tribe ワルシャワの祭典

牛田智大、桑原志織、進藤実優、中川優芽花、山崎亮汰 19

シヨパンコンクール2025 20

1万時間の法則と Gifted 24

究極の量子もつれゝ母親がピアニスト 28

エントロピーは悪魔の血？ 30

## 2nd stage

---

シヨパンコンクールのファイナリスト 33

牛田智大のナラティヴ 38

かていん、アルゲリッチと共演！ 42

# Slavic Dances

ドレンスキーの弟子、  
パレチニ・チルドレン

反田恭平、清塚信也、松田華音、上原彩子、鈴木愛美 47

パレチニかく語りき 48

ソ連VSポーランドの争い 51

反田恭平のメタ認知能力 54

total recallとこう特殊能力 58

## 3rd stage

---

アップデートするショパンの楽譜 60

ポゴレリチに持ちかけられたディールの正体 65

松田華音を育てたロシアンメソッド 70

清塚信也もヒロコ・チルドレンだった 74

チャイコンを制した上原彩子 76

# German Goulash

## 独塊でじっくり熟成

河村尚子、金子三勇士、アリスⅡ紗良・オット、小菅優、

亀井聖矢、久末航、石井琢磨、高木竜馬 81

彼らはコンクールに興味なし!? 82

ドイツ時間はドナウの流れ 84

## 4th stage

---

板に乗る者の宿命 90

裸足でピアノを弾く女 95

ドイツ育ちというアドヴァンテージ 98

亀井聖矢はアルグリッチと同門なの!? 103

三羽鳥と新ウィーン楽派 106

ウィーンでバズった石井琢磨 109

# Dover Swimming

ドーバー海峡を渡ってみる  
パリとロンドン

酒井茜、阪田知樹、務川慧悟、萩原麻未、福間洸太郎、広瀬悦子 117

EMIがしかけた世界戦略 118



## 5th stage

---

イギリスに必要だった創造的破壊 121

Virtuso が AI を駆逐する 124

そうだ、パリに行こう！ 127

阪田知樹と務川慧悟 132

ナント発！「熱狂の日」音楽祭 136

広瀬悦子という鬼才！ 139

# Atlantic Crossing

## アメリカンドリーム

### 〜フォートワースの熱狂

北村朋幹、小林愛実、吉見友貴 143

ほんとうはソ連に留学したかった 144

## 6th stage

---

ダン・タイ・ソン門下の俊英たち 147

カーティスにノジマあり！ 150

浜松からワルシャワ、仙台からフォートワース 154

ユダヤ人が作った新世界アメリカ 159

ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール 164

ナラティヴが生まれる場所 168

## New York Strut

カーネギーホールで  
ピアノを弾く

辻井伸行、藤田真央、角野隼斗 171

クラシックの殿堂 172

---

ポリニーの代役 174

ジャンパー・マオと呼ばれて 179

Sony Classical が目をつけたピアニスト 184

カーネギーホールできらきら星 187

## epilogue 192

QRコードで聴く「ピアニスト 29」 195

参考文献 212

---

6th stage

---

# New York Stru

---

カーネギーホールで  
ピアノを弾く

---

角	藤	辻
野	田	井
隼	真	伸
斗	央	行

---

## クラシックの殿堂

辻井伸行は、2011年11月に初めてカーネギーホールの舞台に立っていた。

カーネギーホール主催〈Keyboard Virtuosos II〉シリーズのひとりにラインアップされたのだ。

その時の模様を収録した『カーネギーホール・デビューLIVE』では、ベートーヴェン《ピアノ・ソナタ第17番「テンペスト」》やムソルグスキの《展覧会の絵》を熱演する彼の演奏が聴ける（DVDもリリースされている）。

「歴史あるホールで演奏するということが本当に信じられなくて、珍しく緊張してしまいました。コンサートで緊張するなんて初めての経験でした。でも、いざ演奏が始まってみると、会場のお客さんがリラックスしているのが伝わってきて、会場との一体感が伝わりました。演奏が終わった後は、達成感と終わっちゃうことの寂しさみたいな感情が入り混じって、思わず感極まって涙が止まりませんでした。今でもあの時のことを思い出します。

また機会があればカーネギーホールで演奏したいですね」（2018・1・31 [avex portal]）

別の媒体のインタビューでも、辻井はこのリサイタルをこんなふうに振り返っている。

「思い出に残っているコンサートはたくさんありますが、一つだけと言われたら、2011年11月10日のカーネギーホールです。音楽の殿堂というだけあって特別な雰囲気を感じましたし、本番前は自分でも驚くほど気持ちが高ぶってしまい、本番の30分前くらいからすぐにでも舞台に行って弾き始めたい、我慢できない！という気持ちになりました。来年の1月に、オルフェウス室内管弦楽団の皆さんと、また同じステージに立てることは幸せですし、とても楽しみです」(2014.2.11 季刊誌「InfoMart」)

と語っているように、2014年の1月、辻井はオルフェウス室内管弦楽団 (Orpheus Chamber Orchestra) との共演で再びカーネギーホールの舞台に立った。

2019年5月10日にはマレイ・ペライアの代役に抜擢され、リサイタルとしては2度目のカーネギーホールの舞台に立っている。プログラムは、サティ《3つのジムノペディ》、ドビュッシー《映像 第一集》、ラヴェル《ソナチネ》、ショパン《スケルツォ (全曲)》。

そして、2023年1月19日にもまたまたカーネギーホールに登場。

チケット完売となったこのリサイタルでは、ベートーヴェン《ピアノ・ソナタ第14番「月光」》、リスト《ヴェネツィアとナポリ》、ラヴェル《ハイドンの名によるメヌエット》、カプースチン《8つの演奏会用練習曲》などを披露した。

2023年以降も数回、カーネギーホールの舞台に立っている（オルフェウス室内管弦楽団との共演も含む）。

辻井伸行というJピアニストは、まるでホームグラウンドのようにクラシックの殿堂に登場するような世界的な音楽家になった。

JAZZ系のピアニストだと、秋吉敏子や上原ひろみがこの世界的なホールで弾いているが、やはりクラシックのピアニストにとっても垂涎の的なのだ。

### ポリーニの代役

2022年の9月、マウリツィオ・ポリーニがカーネギーホールのリサイタルからの降板を発表した。ドクターストップがかかったのだ。夏のザルツブルク音楽祭でも急性心臓病のため開演直前にリサイタルをキャンセルしている。全米ツアーも中止する旨を発表した。もう80歳なのだ。

2023年1月25日。カーネギーホール。この日、代役として起用されたのは2022年夏にルツェルン音楽祭にデビューして話題をさらっていた藤田真央である。

「ニューヨークに降り立つと、意外にも予想していたような厳しい寒さには見舞われず、4〜5℃という過ごしやすい気候だった。喜ばしいことにニューヨーク入りしてから3日間、私は毎日カーネギーホールで練習することができた。どのリハーサル室にもニューヨーク・スタインウェイが備わっていて、用意していただいた練習環境はこれ以上ないほど素晴らしいものだった。館内のいたるところに偉大な芸術家たちの肖像画やコンサート  
たかぶのポスターが飾られてあり、それを見るだけで一音楽ファンとして気持ちの昂りが抑えきれず、練習に向かうその足取りは自然と軽くなった」(『指先から旅をする』藤田真央)

いやいや寒いでしょ。4〜5℃。ま、ニューヨークにしろ、ヨーロッパにしろ冬はむちやくちや寒い。だからこそその春を待ちわびる名曲が多いのだけれど。

「迎えた本番当日。



前夜はしつかり7時間の睡眠をとることができた。しかし時差が悪戯をして21時に眠り朝4時に起きたので、これでは20時の開演まで体力が持たない。再び寝ようと試みても、身体や脳は『ちゃんと7時間睡眠してはいないか』と抗って、眠りに落ちさせてくれない。仕方なく長い時間をかけシャワーを浴び、歯を磨き、7時の朝食の時間になるのを辛抱強く待った。この日は11時からピアノ選びがあり、それまでにはもう一眠りしたいと思っていたのだが、朝食を終えても一向に眠りにつけなかった」(『指先から旅をする』藤田真央)

ここからこの本ではピアノ選びについてのエピソードが綴られているが、そちらは彼の著書でお楽しみいただくとして、いよいよ、本番に向かう。

「モーツァルトの楽曲に真剣に取り組み始めて早3年。これまで何度もコンサートで弾いてきたにもかかわらず、これほど人前で弾くのが怖い作曲家はいない。モーツァルトの楽曲を演奏する際はどの瞬間も、どの音も、どのハーモニーも大切に、ひとたび緊張を緩めると、それまでいくらか素晴らしいものを構築してきたとしても、一気に台無しになっ

まう。制限された強弱の中、ニュアンスやイントネーション、タッチを駆使し魅力的な音楽に昇華させねばならず、そのためには全神経を集中させ、脳を覚醒させながら演奏をしなければならぬ。

そんなことを念頭に置きながら楽屋のピアノで練習をしていると、ついにお呼びがかかった。今か今かと出番を待っていたのに、いざいつ舞台に出てもいい状況になると、足の前に運ぶことを躊躇してしまう。だが意を決しステージドアの前に立つと、そこにいた皆から「Toi toi toi」と声を掛けられた。私は遂にはば満員のカーネギーホールの舞台へ一歩踏み出した」（『指先から旅をする』藤田真央）

「Toi toi toi」とはクラシックのコンサートでアーティストがステージに出る際、スタッフアーティストに声がけするおまじないのようなもの。

藤田の話をもう少し聞いてみよう。

「椅子に座り、モーツァルトの一音目を出したその瞬間、少し違和感を覚えた。リハーサルの時と比べて音質が幾分変わっていたのだ。要因はその日の雨と、ホール満員の聴衆だ

ろう。空っぽのホールで聴いたリハーサルでの響きとは全く別物で、響きが完全に吸収されてしまっている。私は今まで頭に思い描いていた音楽設計図をすぐにしまい、その場で生まれる音楽に注意を払うことを最優先事項とした。既存の考えにこだわりすぎると、モーツアルトのように常に生が宿っているような音楽からはかけ離れてしまう懸念があったからだ。そのため全ての音に意味を持たせ、いくらかペダルを使い、テンポを少し落とし、弾き飛ばさないようにと意識した。そんなことを考えていたらあつという間に《デュポール変奏曲》が終わった。

1曲目が終わり拍手を受けた後、舞台袖に帰ることなく次のソナタを弾き始めた。先ほどの《デュポール変奏曲》で音の感覚や響きを完全に掴むことができたので、ソナタも様々なニュアンスや音色を駆使し、モーツアルトらしさ溢れる解釈と遊び心で弾き終えることができた。

続いてのリスト《バラード 第2番》はモーツアルトとは打って変わって、まさに「ピアノの魔術師」リストによるダイナミックな表現とヴィルトウオーゾ的ピアノイズムが魅力的な難曲だ。だが既にハンブルク・スタインウェイは100%の信頼を置ける相棒となっている。ピアノ本来の良さを十二分に引き出すことで、私はより大きな響きでリストの音

楽を奏でることができ、前半の終了時には大きな歓声と拍手を浴びた。ブラームスから始まる後半の演目も、再び一から冷静に響きを構築し、クララ・シューマンの歌心溢れる音楽を紡ぎ、そしてロベルト・シューマンの悲痛な叫びのような激情の音楽へと昇華させることができた」(『指先から旅をする』藤田真央)

会場はスタンディングオベーション。

藤田真央の最初のカーネギーホール公演は大成功だった。

ジャンパー・マオと呼ばれて

再び、藤田真央がニューヨークに呼び寄せられた。

2024年11月10日。今度は通常のリサイタルだ。

「いよいよカーネギーホールでの2度目のソロリサイタルの日を迎えた。強行スケジュールの中、無事ここまでたどり着いたことにひとまず安堵する。

この日は14時開演のため、朝9時からピアノセレクションが行われた。1年10か月ぶり

に足を踏み入れたカーネギーホールは、変わらず美しい。これまで世界中のホールを数え切れないほど訪れたが、赤い絨毯と蠟のような白い壁、温かい電飾が織りなすこの空間は、やはりどこにも比べられない特別なものだ。2023年1月のデビューはマウリツィオ・ポリーニの代役だった。その後すぐにリサイタルのオフアアを頂き、満足頂けたのだとホッとした。今回NYに来る1週間ほど前にも、チケットの売れ行きが順調だとカーネギーホールからメールがあつたという。『貴方はもう誰かの代役じゃないのよ』とマネージャーが喜んでくれた」（『指先から旅をする2』藤田真央）

そう、藤田は大物アーティストの代役を務めることが多かったのだ。

少し振り返ってみよう。

「お祭りには思わぬアクシデントも付き物です。数え切れないほどの演奏会が企画されるので、体調などの問題でアーティストが舞台に立てず、別の演奏家が代わりに演奏するという事態もしばしば起こります。これを『jump in』というそうで、この夏たくさんの方役を務めたわたしは、ピアニスト仲間から「ジャンパー・マオ」と呼ばれるようになりました

た」(『指先から旅をする』藤田真央)

ここである「お祭り」とは各地で開催される音楽祭のこと。

「この夏」とは2022年夏のことだ。

「7月16日には、オーストリアのロッケンハウス室内楽フェスティバルでサー・アンドラーシュ・シフの代役を担いました。彼の代わりに演奏するのは、21年9月のツィンダリ音楽祭以来のことです。リサイタル前日の打診、しかもあの偉大なピアニストの代役という事で緊張しましたが、リストやブラームスを中心とする得意のプログラムを用意して臨みました。

その翌日には、ヴェルビエ音楽祭のプロデューサーで旧知のマーティンから『至急連絡がほしい』とメッセージが。何かあったのかと電話をかけると、

『ベートーヴェンの1番か2番、どちらか弾けるか?』

と問われました。2番は一度コンサートで弾いたことがあると答えると、『ヴェルビエ音楽祭でアルグリッチの代役を頼む』と。

(中略)

シフやアルグリッチのような大御所の代役ともなると、プレッシャーがすごいでしょうと訊かれることもあります。もちろん責任は感じますし、なにより急遽依頼される代役は、みっちり準備期間をとることができないので、本番直前まで緊張し通しです。それでも、いちど舞台上がってしまえば、あとはわたしのピアノを誠実にお届けするのみ。初めてわたしの演奏を聴くお客様も多い中、会場が一体となって音楽を楽しむことができた日には、もう最高の気分です」(『指先から旅をする』藤田真央)

この夏は、シフやアルグリッチのような大御所2人のほか、思わぬピアニスターの代役も引き受けてしまった。

2022年9月6日、ジョージアのツィナンドリ音楽祭に出演中の出来事だ。

「6日のコンサート終演直後です。わたしのもとに連絡が入りました。ユジャ・ワンが親指を怪我してしまったので、急遽代役を頼めないかというのです。演目はシヨスタコーヴィチの《ピアノ協奏曲第1番 ハ短調 作品35》で、ドルトムント(ドイツ)とブダペスト

（ハンガリー）での2公演。指揮はアンドリス・ネルソンス、そしてライブツイヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団との共演だと聞くやいなや、わたしは『やります』と即答しました』（『指先から旅をする』藤田真央）

ドルトムントでの公演は2日後の9月8日。ジョージアから飛行機の深夜便と鉄道を乗り継いでライブツイヒに着き、彼は7日の夜にはリハーサルに臨んでいた。

「いざリハーサルが始まると、ネルソンスの特異な才にすっかり魅了されました。タクトのタイミングの刻み方ひとつとっても、非常に独特で、曲の解釈もオリジナリティに溢れるものでした。ショスタコーヴィチの曲は、にぎやかさの演出を重視し、装飾的に仕上げようとする演奏家が多い。ところがネルソンスは、人間から湧き出る感情をこそ表現しようとして試みます。」

リハーサルを終えて、ネルソンスはわたしに『僕は人々の内面から滲み出るものでショスタコーヴィチを奏でたい。きみのピアノはそれを体現している。だから、きみとはいいい音楽がつかれると思う』と言葉をかけてくれました。彼とは同じ世界を目指すことができ



る——そう思うと、安心して舞台上上がることができました。

本番では、ピアノとオーケストラの演奏を受け渡すタイミングが阿吽の呼吸でピタリと一致して、ぞくぞくしましたね。ライブツイヒでもブダペストでも、お客様もたいへん喜んでくださって、とても幸福な時間でした。

これはあとから聞いたことですが、ユジャの代役として名前が挙がった候補は4名いたそうです。そしてわたしのことは、ゲヴァントハウス管弦楽団のネルソンスの前のカペルマイスター（楽長）であるシャイーが推薦してくれたということも。4名の候補者中、わたしがショスタコーヴィチを『弾ける』と言いきったために、今回このようなありがたい機会を得ることとなりました。こうやってみると、ひととの縁とタイミングというのは、なんて不思議なものなのでしょう」（『指先から旅をする』藤田真央）

### **Sony Classical**が目をつけたピアニスト

話を2度目のカーネギーホールに戻そう。誰かの代役ではないリサイタルだ。

「舞台袖へ着くとステージマネージャーが照明係に無線で合図をする。すると舞台上がパ

ツと照らされ、世にも美しいカーネギーホールがまばゆく輝いた。『いつでもどうぞ』の言葉で、手持ちのハンカチを整え、カイロをテーブル横へ置き、お願いしますと言ってステージへと進んだ」（『指先から旅をする2』藤田真央）

藤田真央は2022年、Sony Classicalとワールドワイド契約による最初のアルバムをリリースした。モーツァルト『ピアノ・ソナタ全集』である。

それに続くアルバムについて、Sony Classicalのグローバルのマーケティングとコミーシャルオペレーションを担当するアレクサンダー・ベツシュはこう語っている。

「9月にリリースしたニューアルバムには、シヨパンとスクリヤーピン、そして矢代秋雄の『24の前奏曲』が収録されています。1945年、矢代秋雄が15歳のときに書いた作品を世界に紹介したいという藤田さんの希望で録音されましたが、私たちにとっても興味深いプロジェクトでした。」

さらに言うところ、音楽家としての個性だけでなく、誰からも愛される彼のチャーミングなキャラクターも魅力的でしたね」（2024・11・21「Cocotame」）

あの愛されキャラゆえに大物ピアニストの代役に抜擢されるのかなと妙に納得させられるエピソードだが、ともかく、藤田は最初のカーネギーホール（2023・1・25）でモーツアルトを、2度目のカーネギーホールのリサイタル（2024・11・10）でこのアルバムにも収録されている矢代秋雄のプレリユードを数曲演奏した。

「矢代作品は一曲一曲が短く簡潔に描かれており、色鮮やかな描写、個性あるモチーフが現れては消えていく。この日は一曲毎に『次はどのような世界観の曲想なのか』と待ち侘びるお客さんの様子が感じられた。恐らく初めて触れる作品を、彼らが好奇心を切らさず集中して聴いてくれたのは、とても嬉しい瞬間だった」（『指先から旅をする2』藤田真央）

かつて、小澤征爾がリンカーン・センターのフィルハーモニック・ホール、ニューヨーク・フィルとの共演で武満徹《ノヴェンバー・ステップス》の初演を行った（1967・11・9）。

そんなことを思い出す。日本人アーティストとしての矜持もさることながら、ニューヨークという街の「いいものはいい」と受け入れる懐の深さも感じる。

さて、そんな藤田真央を発見した Sony Classical のスタッフが目をつけた J ピアニストがもうひとりいる。

角野隼斗である――。

### カーネギーホールできらきら星

「角野さんにはヨーロッパでお会いしたことがあり、向こうで彼の演奏を聴いて素晴らしいパフォーマーだとは思っていました。でも実際日本に来て、日本武道館をいっぱいに埋めた13000人のお客さんを熱狂させたショウを観て、本当にびっくりしました。

カメラに向かって話しながらの YouTube 中継を取り入れたステージも興味深かったですね。角野さんは自身でも作曲をしますが、新しいクラシック音楽というものが、こんなにも多くの人々に伝わるのだということに感銘を受けました」(2024・11・21「Cocotame」)

そう語るのは、Sony Classical のグローバルの A & R として全体を統括するアレクサンダー・ブルーだ。

アレクサンダー・ベッシュも、武道館コンサートに注目している。

「私たちにあって大きなインパクトだったのは、クラシックのピアノ演奏家である角野さんが、リサイタルを日本武道館で行なったということです。日本武道館という場所は、ヨーロッパをはじめ世界でも有名で、日本の方たちにとって、とても重要な意味を持つ場所であることを私たちも知っています。」

多くのロック、ポップスのアーティストたちが“Live at Budokan”と銘打ったアルバムを作っていますからね。そこでピアニストがたったひとりでリサイタルをする、しかもチケットは完売という話を聞いたとき、これは私たちも観に行かなければ！ と思ったんです」

(2024・11・21「Cocotame」)

角野隼斗はSony Classicalから2024年に『Human Universe』をリリース。世界的なピアニストのひとりになった。

そして、彼もまた、この舞台に立ってしまったのだ。

そう、カーネギーホール・デビュー。

しかも、辻井伸行と同じく、カーネギーホール主催〈Keyboard Virtuosos II〉シリーズ

(藤田真央は2026年3月に〈Keyboard Virtuosos I〉シリーズに登場)。

「カーネギーホール大ホールの満席の拍手の音を、スタンディングオベーションの景色を、きつと私は死ぬ直前まで鮮明に覚えているだろう。」

舞台袖の扉が開き、ステージに向かって歩いていく瞬間、奈落の底に落ちていくような気がした。ステージが無限に大きく見えて、ピアノとの距離はどこまでも遠く思えた。客席に目を向けた瞬間、自分とはとんでもないところに来てしまったのだと思った。天井ギリギリまで席が埋め尽くされていたステージからの客席の光景は、圧巻だった」

(2025・11・22 「note」角野隼斗ーかていん)

と、数日後にかていんも振り返っている。

「よく育ち、よく弾く孫。ニューヨークデビュー、素晴らしかったです」(2025・11・19

「X」矢野颯子 Akiko Yano @Yano\_Akiko)

「終演、拍手喝采のニューヨークデビュー！ 角野隼斗さんの圧巻の演奏は、カーネギーホールの歴史に刻まれました。新星の軌道に、目が離せません！」(2025・11・19 「X」ソ

終演直後のこの2つのPostが物語るように、かていんのカーネギーホール公演は大成功を収めた。

バッハ《前奏曲とフーガ ハ長調 BWV 870》ではじまり、圧巻のラヴェル《ボレロ》を披露し、アンコールの2曲目に《7つのレベルのきらきら星変奏曲》をニューヨークの聴衆にぶつける悪魔っぷりだ。

藤田真央とは違ったストラテジーでニューヨークの夜を制したかていん。カーネギーホールで弾くことをこんなふうに語っている。

「NYでいつもお世話になっている方々をはじめ、日本から、ヨーロッパから、関係者の方々、家族、友達、応援してくれるたくさんの人が聴きに来てくれた。一緒に喜んでくれる人が沢山いるということは、ステージに立てることと同じくらい幸せなことかもしれない。カーネギーホールでリサイタルをするということは、単に音楽家にとって憧れのステージに立つこと以上の、人生の証なのだと思った」(2025・11・22「note」角野隼斗・かていん)

思えば、辻井伸行や小林愛実は既に何度かこのステージに乗っているし、内田光子になると、もはやカーネギーホールの常連だ。カーネギーホールの楽屋や壁の写真も見慣れた風景になっているのだ。

そんなことを考えると、藤田真央と角野隼斗という2人の若きJピアニストにとってはスタートのテープが切られたばかりといえる。

願わくば、2人ともずっとNew York Strutを重ねることができまうように――。

牛田智大も、桑原志織も、亀井聖矢も、いつかニューヨークで。



---

# Album Guide

---

QRコードで聴く  
Jピアニスト29

---

## QRコードで聴くJピアニスト29 トリセツ

「ここ数年、世界中で輝いている現役世代のピアニスターを語り尽くしてみました。

これまでの日本人ピアニストのフォーラムでは収まりきれない才能溢れる彼らのことを、『Jピアニスト』と呼ぶことにした」

と prologue で書いた。

補足をする、Jピアニストとは「推し活」ができるピアニストである。

コンサートに行つて生演奏に触れること、そして、彼らの新譜を聴くことだ。

ネットで視聴するしたら YouTube、TikTok、そして配信。かつてのレコード、CDに代わるのが配信。ダウンロードであれ、ストリーミング（サブスクも含む）であれ、再生数がアーティストにベネフィット（利益）をもたらすのだ。

ということ、本書に登場したJピアニストたちのアルバムをQRコードで聴けるようにした（残念ながら桑原志織のみ、アルバムの配信がない）。必ずしもベストチョイスということではないので悪しからず。

尚、レーベルのあとの（ ）は原則として録音年を入れた。



## 牛田智大

ショパン・リサイタル 2022

Universal Music (2022)

2022 年でデビュー10 周年。《幻想曲 へ短調》ではじまり《マズルカ 第49 番 へ短調（遺作）》で終わる通好みのショパン・リサイタル。奇しくもショパンコンクール2025 のFibral 課題曲になった《幻想ポロネーズ》もここで聴ける。

Spotify



Amazon Music



Apple Music



## 進藤実優

～第18回ショパン国際ピアノ・コンクール・ライヴ

NIFC (2021)

ショパンコンクール2021のライヴ録音。2025ではFinalに残った彼女の《夜想曲第13番》《バラード第3番》《アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ》《舟歌 嬰へ長調》などが聴ける。なんと端正でクリアな音色よ！

Spotify



Amazon Music



Apple Music





## 中川優芽花

中川優芽花 デビュー!

King Records (2024)

心穏やかなるシューマン《子供の情景》ではじまるこのアルバム、ラフマニノフ《前奏曲》の怪しげな響きと躍動感、そして《ヴォカリーズ》はどこまでも哀しい。これってデビューアルバムだよね!?

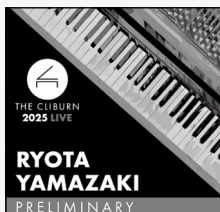
Spotify



Amazon Music



Apple Music



## 山崎亮汰

2025 Cliburn Competition: Ryota Yamazaki  
– Preliminary Round (Live)

Platoon (2025)

ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール 2025、予選 Round のライヴ録音。バッハ=ブゾーニ《来たれ、異教徒の救い主よ》、モーツァルト《ピアノ・ソナタ第18番》、リスト《「ノルマ」の回想》などを瑞々しいピアノズムで!

Spotify



Amazon Music



Apple Music





## 反田恭平

モーツァルトピアノ協奏曲第17番ト長調 K.453

反田恭平（指揮・ピアノ）、MLM ナショナル管弦楽団  
NOVA Record（2019）

自ら奈良に立ち上げたオケを弾き振りしてのモーツァルト。ダニエル・バレンボイムも、内田光子も、モーツァルトのコンチェルトの弾き振りで評価を得ている。配信のみのリリースというあたりも反田恭平らしくていい。

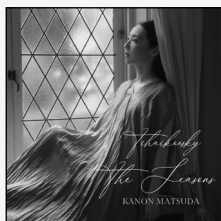
Spotify



Amazon Music



Apple Music



## 松田華音

チャイコフスキー：《四季》他

Universal Music（2025）

アヴデーエワ姉さんの妹分、松田華音待望の第3弾！ 1st アルバムでは、ベートーヴェン、リスト、ショパンを、2nd アルバムではムソルグスキーをチョイスした彼女。本作は静謐かつ上品な音色で描くチャイコとリストなど。

Spotify

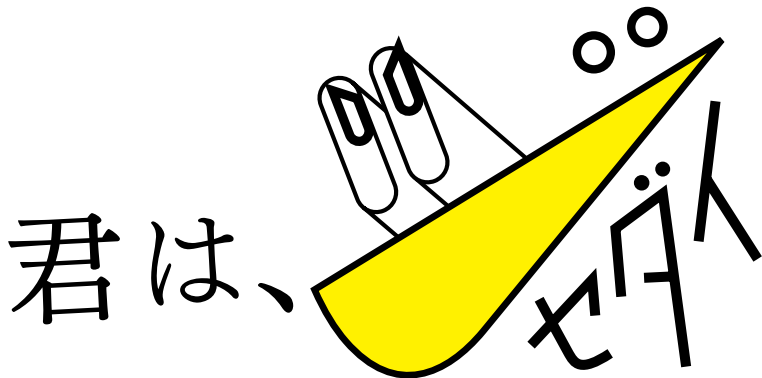


Amazon Music



Apple Music





何と闘うか？  
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、  
行動機会提案サイトです。読む→考える→行  
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ  
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう  
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月  
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。  
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、  
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**